

問1 弥生時代の社会における銅鐸の特徴や役割について述べた文として、正しいものを選びなさい。（2023年 三重公立入試 類似）

- 次第に大型化し、表面には当時の生活や自然を反映した装飾が施されるようになった
- 鉄器よりも硬度が高いという性質を活かし、木を伐採するための工具として普及した
- 大陸との交易を円滑に進めるために、重さに応じた価値を持つ貨幣として使われた
- 各個人の家の中に置かれ、日常的に家族の健康を祈るための仏具として使われた

問2 歴史上の生産活動の発展において、農具の素材が変化したことは大きな意味を持ちます。鉄製の刃先を用いた農具への変化について説明したものととして、正しい記述を選んでください。（2016年 富山県公立入試 類似）

- 木製の土台に鉄の刃先を組み合わせる工夫により、耕作の効率が向上した
- 鉄は加工が困難であったため、刃先も含めてすべて石で代用する手法が普及した
- 鉄製の農具は重すぎて実用的ではなかったため、主に祭祀用の道具として使われた
- 鉄の刃先が導入された後も、土を耕す作業には一貫して木製のみの道具が使われ続けた

問3 1世紀半ば、奴国の王が中国の王朝（漢）に使者を送り、金印を授けられたという出来事について、その当時の国際関係のあり方や目的を説明したものととして最も適切なものはどれですか。（2026年 山口公立入試 類似）

- 中国の皇帝に朝貢してその支配下に入ることで、自身の王としての地位を認めさせ、国内での権威を高めようとした
- 対等な立場での外交を求める国書を送り、大陸の進んだ律令制度を日本へ速やかに導入することを目的とした
- 朝鮮半島での軍事的な優位を確保するため、中国の王朝と軍事同盟を結び、援軍を派遣してもらう約束を取り付けた
- 仏教を日本に広めるため、優れた経典や仏像を日本へ持ち帰る許可を皇帝に求める使節を派遣した

問4 3世紀の日本の様子が記された中国の史書『三国志』の「魏志」倭人伝において、約30の国々をまとめ、中国の魏に使いを送ったとされる邪馬台国の女王は誰ですか。（2025年 長野公立入試 類似）

- 卑弥呼
- 持統天皇
- 推古天皇
- 北条政子

問5 中国の歴史書には、紀元前1世紀頃から1世紀頃にかけての倭（日本）の様子が記されています。これらの記述についてまとめた次の説明のうち、最も適切なものはどれですか。（2023年 大分県公立入試 類似）

- 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。
- 『後漢書』東夷伝には、卑弥呼が30余りの国を従え、魏の皇帝から「親魏倭王」の称号を授かったことが記されている。
- 『漢書』地理志には、奴国の王が後漢の光武帝から金印を授かり、中国との交流を深めたことが記されている。
- 『魏志』倭人伝には、倭の王が初めて中国の皇帝に朝貢し、大陸の進んだ青銅器文化を日本へ持ち帰ったことが記されている。

問6 中国の歴史書「魏志倭人伝」に記録されている邪馬台国の女王卑弥呼は、当時の中国の王朝である魏に使いを送りました。卑弥呼がこのような外交を行った背景や、その結果として得た称号について述べた文として正しいものはどれですか。（2026年 大阪公立入試 類似）

- 自らの権威を高めるために中国と通じ、皇帝から「親魏倭王」の称号を授かった。
- 仏教を日本に広めるための援助を求め、皇帝から「倭王武」の称号を授かった。
- 白村江の戦いでの協力を依頼するため、皇帝から「日本国王」の称号を授かった。
- 大陸の優れた青銅器技術を独占するため、皇帝から「遣隋使」として認められた。

問7 日本列島と朝鮮半島の位置関係を示した地図において、九州地方の北部（現在の佐賀県付近）に位置し、大陸との交流や当時の防御の様子を今に伝える弥生時代の代表的な遺跡はどれか、選びなさい。（2020年 和歌山公立入試 類似）

- 吉野ヶ里遺跡
- 登呂遺跡
- 三内丸山遺跡
- 岩宿遺跡

問8 中国の歴史書である『後漢書』東夷伝には、1世紀半ばの57年に倭の奴国の王が使者を送り、皇帝から印綬（印と紐）を授かったという記述があります。このとき授けられたとされる「漢委奴国王」と刻まれた金印が、江戸時代に発見された現在の福岡県にある場所はどこですか。（2023年 大阪公立入試 類似）

- 志賀島
- 壱岐
- 対馬
- 種子島

## 答え合わせ・解説

問1	<b>答え 1</b> 次第に大型化し、表面には当時の生活や自然を反映した装飾が施されるようになった	青銅器は、鉄器に比べると柔らかいという性質があるため、実用的な工具や武器よりも、権威を示す宝物や祭りの道具として発展しました。銅鐸は時代が下るにつれて、音を鳴らすためのものから「見るためのもの」へと大型化し、表面には狩猟や農耕の様子など、当時の社会を映し出す絵画的な装飾が見られるようになります。
問2	<b>答え 1</b> 木製の土台に鉄の刃先を組み合わせる工夫により、耕作の効率が向上した	古代の農具の改良に関する資料などでは、木製農具の先端部分を鉄で補強する記述が見られます。鉄は木材よりも硬く鋭いため、これを刃先として利用することで土地を効率よく耕し、生産性を高めることができました。こうした技術の進歩が、のちの国力の増大や社会構造の変化を支える基盤となりました。
問3	<b>答え 1</b> 中国の皇帝に朝貢してその支配下に入ることで、自身の王としての地位を認めさせ、国内での権威を高めようとした	当時の日本（倭）は多くの小国に分かれて争っており、各国の王は、強大な力を持つ中国の皇帝に貢物を捧げる「朝貢」を行いました。それに対して皇帝がその土地の支配権を認める（冊封）ことで、王は自国内や周辺の国々に対して自分の正統性や優位性を誇示しようとした。1世紀の奴国の王による外交も、こうした背景によるものです。
問4	<b>答え 1</b> 卑弥呼	3世紀の日本（倭）では、多くの小国が争っていましたが、邪馬台国の女王である卑弥呼が呪術的な力を背景にこれらをまとめ上げました。彼女は239年に中国の魏へ使者を送り、外交関係を築いたことが『魏志倭人伝』に記録されています。
問5	<b>答え 1</b> 『漢書』地理志には、倭人が100余りの国に分かれて生活し、定期的に朝鮮半島の楽浪郡へ使節を送っていたことが記されている。	紀元前1世紀頃の日本の様子は、前漢の歴史を記した『漢書』地理志に「倭人は100余りの国に分かれていた」と記録されています。一方、1世紀半ば（紀元57年）に奴国の王が金印を授かった記録は『後漢書』東夷伝に、3世紀の卑弥呼に関する記録は『魏志』倭人伝（『三国志』の一部）に記されており、書物と時代・内容を正しく区別する必要があります。
問6	<b>答え 1</b> 自らの権威を高めるために中国と通じ、皇帝から「親魏倭王」の称号を授かった。	卑弥呼は、中国の王朝である魏に使者を送ることで、当時の先進国である中国の皇帝から自らの統治を認めてもらおうとしました。その結果、魏の皇帝から「親魏倭王（しんぎわおう）」という称号や金印、多数の銅鏡などを授かり、その権威を背景に国内の統治を安定させようとしたと考えられています。
問7	<b>答え 1</b> 吉野ヶ里遺跡	弥生時代に現在の佐賀県に築かれた、大規模な環濠集落（かんごうしゅうらく）の跡です。物見やぐらや二重の濠、大規模な墳丘墓などが発見されており、クニの成立過程や大陸との交流を研究する上で極めて重要な遺跡です。静岡県の登呂遺跡や青森県の三内丸山遺跡とは所在地や時代、特徴が異なります。
問8	<b>答え 1</b> 志賀島	1784年に福岡県の志賀島で農作業中に偶然発見された金印は、縦横約2.3cmの純金製で、「漢委奴国王」の五文字が刻まれていました。これは『後漢書』にある「建武中元二年、倭の奴国、貢を奉じて朝貢す…光武、賜うに印綬を以てす」という、後漢の光武帝が奴国の王に印を与えたとする記述を証明する非常に重要な歴史的発見となりました。